

【原 著】

初学者に対する有効性の高い指導方法

—英語授業とピアノ実技指導における「既知のもの」の活用をめぐって—

萩野 勝 伊達 優子

The Importance of Using Things Students Have Already Known

—Effective Methods for Teaching Unmotivated Students in English Education and Piano Training—

Masaru OGINO, Yuko DATE

2019

岡山大学教師教育開発センター紀要 第9号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.9, March 2019

初学者に対する有効性の高い指導方法

—英語授業とピアノ実技指導における「既知のもの」の活用をめぐる—

荻野 勝※1 伊達 優子※2

本稿では、大学における英語授業とピアノ実技指導における初学者の苦手意識の傾向を分析し、初学者の苦手意識をなくすための有効性の高い指導方法を検討する。英語学習における学生の苦手意識は、「英語ができない」という強い感情、徒労感、不安感、嫌悪感、無関心、英語を無理やり学習させられているという感情に集約される。このような苦手意識を除くために、学生がすでに学習している英語5文型を用いた簡単な「自由英作文」を行いながら、学生の英語学習の習慣の形成、および英語で表現することに対する関心の喚起を図っていくことを提案する。ピアノ実技指導における学生の苦手意識は、嫌悪感、拒否感、不安感・恐怖感、焦燥感、劣等感、孤独感、義務感、音楽表現との乖離に集約される。このような苦手意識を除くために、既知の曲の「変奏曲」を用いてピアノ実技指導をすることを提案する。

キーワード：英語指導、ピアノ指導、苦手意識、興味の喚起、「既知のもの」の活用

※1 岡山大学全学教育・学生支援機構

※2 就実大学教育学部初等教育学科 就実短期大学幼児教育学科 非常勤講師

I 緒言

大学における英語教育とピアノ実技指導。このふたつは一見、全く異なる教育のように映る。大学での英語教育は、一般にクラス30名から40名に対して行われる。一方、ピアノ実技指導は一人一人の学生に対して行われるが、時間の制限上、一回のレッスンが一人につき10分程度という短い時間で学生にポイントを理解させ、技能の向上を図らなければならない。

このような相違点はあるが、「授業とは、教員と学生とのコミュニケーションである」という点では、両者は同じである。英語授業においてもピアノ実技指導においても、教員は学生の受講態度に現れる心の微妙な変化を感じ取り、それに対応した授業展開を瞬時に図らなければならない。特に、学んでいる科目に対して苦手意識を持つ学生には、常時注意を払う必要がある。なぜならば苦手意識等の負の感情は、他の学生の学習態度にも影響を及ぼすからである。

本稿では、大学における英語教育とピアノ実技指導において、学生が抱く苦手意識に対して、その対応策を検討する。まず第2章では、英語やピアノ実技に関して実施した学生の意識調査を報告し、苦手意識の要因を分析する。そして第3章・第4章では、学生の苦手意識を除くための方策を検討する。その結果、英語教育においてもピアノ実技指導においても、学生の苦手意識を除くためには、「既知のもの」、つまり学生がすでに知っているものを活用することが有効であるという推測に至った。

Ⅱ 英語とピアノ実技における初学者の苦手意識の傾向

1 英語初学者の苦手意識の分析

—「英語」授業を受講する学生のアンケートから—

(1) 大学生にとっての英語学習とは

大学生にとっての英語学習の意義は様々である。英語力がすでにあり、大学院での専門課程へと進学を希望する学生は、英語論文を読んで、海外での研究発表をするために、自分の英語力をさらに伸ばさせようとするであろう。またグローバル企業に就職し、将来世界を股に掛けて仕事をするを考えている学生も、英語学習に積極的に取り組むであろう。しかし、大学院へ進む予定も、国際的な企業に就職する予定もない学生は、大学に入学すると英語を学ぶ目的を見失ってしまう。大学受験時には、「英語」は重要科目として、多くの学生が真剣に取り組んできたのであるが、大学に入学した途端、その学習理由を失ってしまうのである。

特に、英語に対して苦手意識を持ってきた学生は、大学に入ってまで英語を学習しなければならないことに嫌悪感を覚えるようである。大学入学までの長い間、自分を悩ませてきた英語にまた苦しめられるのか、と考える学生も少なからずいるようである。

そのような中で、大学の英語教育に求められるものは、英語スキルの向上は言うまでもないことだが、それ以上に、学生の英語に対する、そして英語学習に対する興味の喚起であると考えられる。

このような観点から、大学生の英語および英語学習に対する意識調査を実施することが必要であると考えた。第2項では、まず学生が英語を「好き」あるいは「嫌い」と感じる要因を特定する。そして、特に学生が英語を「嫌い」と感じている要因を分析することにより、学生の意識を否定的なものから肯定的なものへと変化させる方策を検討する。

(2) 大学生の「英語」に対する意識調査

大学生が「英語」に対してどのような意識を持っているのかを調査し、特に否定的な感情についての詳細な内容を把握する。

①調査概要

調査期間：2018（平成30）年度11月

対象学生：「英語」授業における筆者担当学生 102名

調査方法：授業時にアンケートを実施し、重要と判断される項目を筆者が抽出。

②質問内容

「英語が好きか嫌いか」、「その理由」、「英語学習に関して、不安なこと・心配なこと」の3点

③調査結果

「英語が好きか嫌いか」を表1に、「肯定的感情の詳細」を表2に、「否定的感情の詳細」を表3に示す。

表1 英語が好きか嫌いか

意識	好き	どちらでもない	嫌い
人数	19名	55名	28名

表2 肯定的感情の詳細

項目	内 容 例
異文化への憧れ	<ul style="list-style-type: none"> ・洋画や洋楽が好きだ ・英語に触れていると、自分の世界が広がったように感じる
コミュニケーションの喜び	<ul style="list-style-type: none"> ・違う国で育ち、違う価値観を持った人と話すことができるのが楽しい ・英語に限らず、言語はコミュニケーションの幅を大きく広げてくれる
言語への関心	<ul style="list-style-type: none"> ・文法を理解して文を読むと、正確に理解できる ・感情を表すときなどの英語の独特な表現が好き ・日本語以外の言語を使って、自分の考えや伝えたいことを話すことに神秘さと共に面白さを感じる
格好良さ	<ul style="list-style-type: none"> ・英語を話せたら格好良い

表3 否定的感情の詳細

項目	内 容 例
「できない」感	<ul style="list-style-type: none"> ・単語が覚えられない ・文法が覚えられない ・発音が覚えられない ・聞きとれない、聞いても理解できない ・言いたいことが英語で表せない ・構文が分からない
不安感	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の話す英語が、実際の会話で相手に通じるか分からない ・自分の書いた英語が文法的に正しいのかどうか不安 ・自分の学習方法で英語力が向上するのか不安 ・今後、英語論文を書いたり読んだりできるか不安

徒労感	<ul style="list-style-type: none"> ・単語や文法を覚えても、数学や物理のような達成感がない ・数学と違って、理解して覚えることができない。
嫌悪感	<ul style="list-style-type: none"> ・高校までの授業でもう十分 ・どうしても英語が好きになれない ・英語のテストが嫌だ
無関心	<ul style="list-style-type: none"> ・英語に関心がない ・外国人が苦手だから英語に興味を持ってない。
強制感	<ul style="list-style-type: none"> ・授業で強制的に勉強させられるのが嫌 ・必修科目はかえってやる気を削がれる

(3) 苦手意識の分析

Ⅱ-1-(2)の表1が示しているように、学生の英語に対する意識は、アンケート協力者102人のうち約2割が「英語が好き」、約3割が「嫌い」、約5割が「どちらでもない」というものであった。「どちらでもない」を選んだ学生は、自由記述欄を読むと、英語に対する肯定的感情があるのだが、否定的感情も同時に存在するために、「どちらでもない」を選択していることが分かった。また、英語が「好き」と回答した学生も、「自分の英語が通じるのか不安」等の不安な感情を持ち、英語が「嫌い」と回答した学生も、「洋楽は好き」等の英語に対する肯定的な感情を持っていることが分かった。

学生の英語に対する肯定的感情は、「異文化への憧れ」「コミュニケーションの喜び」「言語への関心」「かつこよい」という4項目に大別された。特に「異文化への憧れ」では、「洋楽や洋画が好きだから」と回答した学生が12名いた。また、「英語を話すことができたら格好良い」と回答した学生が10名いた。

一方、学生の英語に対する否定的感情は、「英語が『できない』感」「不安感」「徒労感」「嫌悪感」「無関心」「強制感」という6つの感情に分類した。

英語に対する否定的感情のうち最も多いのが、「自分は英語ができない、英語を上手く学習することができない」という強い意識である。特に「単語」を覚えることができないと回答した学生が26名いた。また、「文法」を覚えることが苦手とする学生が17名、「発音」を覚えることができないとする学生が9名いた。ここで注意すべきことは、多くの学生は、英語は「覚える」ものと考えていることである。芦永が指摘しているように、英語とは人と人とがコミュニケーションするための一つの手段である(芦永 243-45)。しかし、多くの学生は英語は覚えるためのものと思いつき、このことが彼らの「英語ができない」という意識に結びついているのである。

英語は覚えるためのものであるという消極的意識は、「徒労感」「不安感」にも繋がる。「徒労感」は、英語をいくら学習しても実力がついたと感ぜられないという思いである。「不安感」は、自分の書くあるいは話す英語が果たして相手に通じるのかという不安、このままで本当に将来必要とされる英語力を身につけることができるのかという不安である。いずれの場合も、正しい方向で語学学習を継続していけば、徒労感や不安感が払拭されるべく、英語力が向上していくことを学生に感じさせる

ことが肝要である。

「嫌悪感」、「無関心」、「強制感」は、対応が難しい感情である。嫌悪感、無関心は、それぞれ「英語はどうしても嫌い」、「英語に興味を持ってない」という感情であり、強制感は、「大学において英語を学ばなければならないことに対し抱く反感」である。これらの感情は、根が深い。このような感情を抱く学生に対しては、英語及び英語学習がいかに興味深いものかを根気強く提示していく必要があるであろう。

2 ピアノ初学者の苦手意識の分析

—保育者養成課程学生のアンケートから—

(1) 保育者養成課程学生に求められるピアノ能力

保育者（幼稚園教諭・保育士の両者を指す）には、子どもの音楽的な表現活動を助長するための様々な音楽的能力が求められる。子ども達の音楽活動の場では、保育者の音楽的表現力は子どもの音楽的活動を活性化させ、活動の質を高めるうえで大きな役割を果たすものである。したがって、保育者養成課程においては、学生のこのような資質をいかに獲得させ、伸ばさせるかが課題となってくる。

そこで、保育者養成課程におけるピアノ実技指導では、学生が実際に保育者として実践に当たる前に、どのように音楽を表現すれば子ども達に伝わるのか、この音楽で何を子ども達に伝えるのかなどについて、学生自身に思考させ、自ら表現させることをピアノという表現手段を通して学生自身に模索させることが必要である。その上で、子どもの表現に共感できる眼差しと的確な判断力、また、自らが良き表現者として存在するための音楽的素地を培っていかなくてはならない。

一方、学生の入学時における音楽的な知識やピアノ演奏技能は、それまでの経験の有無や長短によって実に様々である。経験が長くても実際の演奏技術が伴っていない学生、経験と演奏技術が合致している学生、まったくの未経験者、音楽用語や、基本的音楽理論の理解のない学生など、実に多岐にわたっているのが現状である。さらに、“ピアノを弾くこと”そのものに対して否定的な感情を持った学生も残念ながら多く存在していることもまた、現状である。

このような学生の現状を踏まえ、養成校においては、学生の音楽的な能力の多様性にも対応し、どのような状態の学生に対しても一人ひとりのできうる限りの力の中で音楽を表現させ、“ピアノを弾くこと”に対する否定的感情を克服させていく指導を行っていかなくてはならない。そのためには、どのようなレベルの学生に対しても、自らの力で表現内容を考えていける道筋を提示し、自分自身が良き表現者であるべきという自覚と、その必要性を認識させていくような授業が必要ではないかと考えている。

以上のような見地から、保育者養成課程学生の“ピアノを弾くこと”に対する具体的な意識を調査し、苦手意識を克服させる指導内容を考案することが必要である。

(2) 保育者養成課程学生の“ピアノを弾くこと”に対する意識調査

保育者養成課程学生が、“ピアノを弾くこと”に対してどのような意識を持っているのかを調査し、特に否定的な感情についての詳細な内容を把握したい。

①調査概要

調査期間：2006（平成18）年度～2010（平成22）年度

対象学生：音楽（器楽）授業における筆者担当学生 80名

調査方法：入学時のアンケート，授業中における学生の発言を筆者が記録，学生の授業感想文等の記述からの抽出

②質問内容

「音楽自体が好きか嫌いか」，「ピアノが好きか嫌いか」2点

③調査結果

「音楽自体が好きか嫌いか」を表1に，「ピアノが好きか嫌いか」を表2に，「肯定的感情の詳細」を表3に，「否定的感情の詳細」を表4に示す。

表1 音楽自体が好きか嫌いか

意識	好き	どちらでもない	嫌い
人数	80名	0名	0名

表2 ピアノが好きか嫌いか

意識	好き	どちらでもない	嫌い
人数	28名	14名	38名

表3 肯定的感情の詳細

項目	内 容 例
ピアノが好き	<ul style="list-style-type: none"> ・きれいな曲や好きな曲を見つけて弾くことができる ・苦勞することもあるが，ピアノを弾くこと自体は好き
ピアノに自信がある	<ul style="list-style-type: none"> ・幼少の頃から，音楽やピアノに親しんできたから

表 4 否定的感情の詳細

項目	内 容 例
嫌悪感	<ul style="list-style-type: none"> ・「とにかく苦手」という意識が離れない ・楽譜が読めない ・リズムが苦手 ・面倒くさい ・いろいろ注意されると泣いてしまうほど辛くなる
拒否感	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノそのものが嫌 ・弾いていて楽しくないので、肩が凝ったり手が痛くなったりして、余計に楽しくない ・練習しても全然上手にならないから嫌 ・練習することが嫌
不安感・恐怖感	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノを弾くことそのものが怖い ・大きな音を出すことが怖い ・大きな音を出すと間違ってしまうのではないかと思ひ、とても不安になる ・自分が上達したのかどうか分からず、不安になる ・人より遅れているので、ピアノが恐ろしい
焦燥感	<ul style="list-style-type: none"> ・初心者なので、「とにかく皆に追い付かなくては」という焦りばかりが先に立つ ・周りの皆と比べてしまい、ピアノに対していつも気持ちが焦っている
劣等感	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノが遅れている自分が弾き出すと、自分がとても小さくなるのが分かる ・大学入学までのブランクが長く、他の人と比べてほとんど素人だ ・ピアノが弾けないことが自分のコンプレックスになっている ・他の人に比べて、自分は本当に下手だ
孤独感	<ul style="list-style-type: none"> ・一人で練習していると、孤独感にさいなまれる
義務感	<ul style="list-style-type: none"> ・「しなさい」と言われ続けてきたから
音楽表現との剥離	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノと保育が自分の中で結びつかない ・難しい曲が弾けて、指が動きさえすればよい ・リズムや音が間違わなかったらいい ・ただ楽譜通りに弾けばいい

(3) 苦手意識の分析

半数の学生が“ピアノを弾くこと”に対して、否定的感情・苦手意識を持っていることが判明した。この「嫌い」の中には、「とても嫌い」という学生も存在し、か

なり強い嫌悪感を抱いていることもうかがえる。

「嫌い」の感情内容を分析すると、「嫌悪感」、「拒否感」、「不安感・恐怖感」、「焦燥感」、「劣等感」、「孤独感」、「義務感」、「音楽表現との剥離」の8項目に大別される結果を得られた。

「嫌悪感」に示させる、楽譜が読めない、リズムが苦手という内容からは、基本的な音楽的知識の欠如が苦手意識となっていると推測できる。

「拒否感」に示される、弾いていて楽しくないという内容からは、課題とする曲自体に、学生自身が「楽しそう」と思えるような選曲を指導者が行うことの必要性がある。

「音楽表現との剥離」に示される、ピアノと保育が自分の中で結びつかないという内容からは、課題とする曲自体に、学生が、将来の保育者となる自分の姿と結びつくような選曲を指導者が考える必要がある。¹⁾

Ⅲ 大学生の英語指導における「自由英作文」の有効性の予測

1 苦手意識克服を目指した英語指導

英語に対して苦手意識を持つ大学生を指導する上で、注意すべき点は学生の苦手意識が根強いということである。学習者は、大学に入学するまでの長い間に英語に対する嫌悪感や苦手意識を強めてきてしまっている。今更、無理に学習を強いても効果がないと考えられる。

大切な点は、授業を通して、学生が自分から「英語を学習したい・もっとしてみたい」という気持ちを抱かせることである。それでは、教員から強制されていると感じさせないで、学生に自分から英語を学習したいと思わせるにはどうしたら良いか。

2 「自由英作文」の有効性の予測

(1) 「自由英作文」とは

その良い方法が「自由英作文」であると考えられる。「自由英作文」は、大学におけるライティング授業においてはウォーミングアップとして、また高校においては受験対策として、すでに広く活用されているが、英語に対する嫌悪感や苦手意識を持つ学生に対しては、「自由英作文」がそれらを克服する方法として特に有効であると考えられる。

Ⅱ-1-(3)で触れたように、英語学習というと、学生は「単語を覚える」「文法を覚える」「発音を覚える」というインプットする作業を真っ先に思い浮かべる。多くの学生が「英語学習＝覚えること」と考えているのである。しかし、少なくとも8年間も英語を学習してきた学習者にとっては、インプットよりもアウトプットに重点を置いて指導した方が有効であると考えられる。その理由は、インプットは受け身的な学習であり、その受動的な態度が学習効果に正の効果をもたらす可能性は高くないからである。

「自由英作文」の英文であるが、最初から難しい英文を書くのではなく、5文型を使った簡単な構文の英文を書くことが肝要である。短文でも良いだろう。学生が英文を書くことに慣れてくるに従って、書ける文の量が次第に増え、文の長さも増し

てくるであろう。また学生は、自分の言いたいことが英語で表現できる嬉しさ、喜びを感じるようになるであろう。

自由英作文には、二つの方法があると考えられる。一つは、あるテーマについて、ただ英文を書くということである。これは、特に英語の苦手意識が強い学習者に適している。あるテーマに関して自分が思うことを、頭に浮かんだ順に英語で書くというものである。ただ英文を書くということに専念する。

もう一つの方法は、二つのステップからなる。最初のステップは、上に述べたように、あるテーマについて思ったことを英語で書くということである。そして第2のステップは、ある程度英文が書けたところで、それをまとめてみるということである。第2のステップを経ることで、自分の書いた英文を読み直すことにより、学習者は、自分の書いた英文が正しいかどうか、あるいはより適切な表現があるかないかを検討することができる。また自分の英文をまとめ直すことによって、学習者は、それまであいまいであった自分の考えをより明確にすることができるのである。その理由は、日本語であれ英語であれ、書くという行為により、人は思考能力を強化できるからである (Cowie 3)。

このアクティビティにおける教員の役割であるが、学生に自由に英文を書かせることである。トピックを与えてもいいし、全く自由に学生に書かせてもいい。自由英作文の終了後、学生にペアを組ませ、お互いの英文を交換して読ませるとより効果があるであろう。教員による学生の作文の添削は、学生の英文を書くことに対する前向きな気持ちをかえって削いでしまう可能性があるため、添削ではなくコメント程度にすると良い。気の利いたコメントは学生のやる気を促すものとなるであろう。

(2) 英語学習全般における「自由英作文」の有効性について

「自由英作文」はライティング力の向上にとどまらず、学習者の英語力全体を伸ばさせると考えられる。英語のライティング力が向上すれば、自然とそれを人に伝えたいという気持ちになるはずである。そうすると自然と意識がスピーキングにも向かい、人と英語で話したいという気持ちが高まる。さらに、話す相手に自分の意見をより正確に伝えたいという思いから、発音にも注意が払われるようになる。発音の学習は、英語への関心が喚起されていない状態では、それほど効果が高くないが、学習者が本気で英語で話そうと感じるときに学習すると有効性が非常に高くなる。そして、話すためには、相手の言うことを聞かなければならないことから、学習者はリスニングの能力の向上に向けて自然と努力するようになるであろう。

英単語の学習に関しても、「自由英作文」は効果があると考えられる。英語に対する苦手意識や嫌悪感を持つ多くの学生は、Ⅲ-2-(1)で記したように、「英語学習＝単語を覚えること」と考えている。しかも自分の英語力不足の原因が語彙力不足と考え、単語を覚えようとするのだが、その行為そのものが受け身的なものであるため、覚えてもすぐに忘れてしまうと考える、という悪循環に陥ってしまう。

自由英作文では、無理に単語を暗記する必要はない。知らない英単語を和英辞典で調べることは、自分の思うことを英語で表現する一つの手段として行うものであ

り、無理に英単語を覚えることとは別次元のものである。学習者は、自分の表現したい単語を何度も和英辞典を使って調べているうちに、その単語を自然に記憶することができるようになる。また単語は相手に物事を伝達するための手段であり、無理に記憶する必要がない、ということの理解に次第に達するのである。

やがて何度も繰り返し辞書で調べる単語に関して、自然と興味が湧いてきて、英和辞典を用いて、その単語の他の意味、用法、語源などについて調べてみようという気持ちが起こるかも知れない。特に動詞などは、前置詞との相関についても注意が向けられるようになれば、英語力は必ず向上して行くであろう。

「自由英作文」は、リーディングの技能向上にも役立つと考える。その理由は、英語を書くという行為を通して、学習者が英文を読むときに、書き手の立場に立って英文を読めるようになるからである。また逆に、学習者は英文を読みながら、論旨の展開など、自分の英文を書く時のヒントを吸収しようとする態度を形成することができると考えられる。

この「自由英作文」の学習方法は、やがて英語で日記をつけるという習慣に繋がってゆく。自分の身に起こったことや思ったことを英語で表現することは、自分の考えをまとめるのに役立つだけでなく、Ⅱ-1-(2)の表2のコメントに「日本語以外の言語を使って、自分の考えや伝えたいことを話すことに神秘さと共に面白さを感じる」とあるように、英語で物事を表現するという点で、日本語で日記をつけるのとは異なる喜びや満足感を学習者にもたらすであろう。

このように、「自由英作文」の活用によって、学生は「英語が苦手・嫌い」という意識から、「もっと英語で表現してみたい」、「英語を話せたらカッコいい」という気持ちに変化して行き、英語に対する関心が深まり、延いては英語力が向上すると予測できるのである。

Ⅳ ピアノ指導における「変奏曲」の有効性の予測

1 苦手意識克服を目指したピアノ指導

“ピアノを弾くこと”に対して否定的感情や苦手意識を持った学生は、練習する曲そのものが全く未知の曲であれば、これまでの筆者の経験から、嫌悪感や拒否感といった否定的感情がさらに深くなってしまう、という傾向にある。

Ⅱ-2-(3)で明らかになった「楽譜が読めない」、「リズムが苦手」を克服するためには、やはり、未知の曲に最初から取り組むよりも、既知の曲からの取り組みが必要と考えられる。その既知の曲を基として、様々な基礎的な音楽的知識、リズムの理解が促される選曲、つまり、「既知の曲からの展開」ができる曲が有効ではないかと考えられる。

「拒否感」に示される、弾いていて楽しくないという内容からは、課題とする曲自体に、学生自身が「楽しそう」と思えるような選曲を指導者が行うことの必要性がある。したがって、学習曲そのものが、「親しみのある曲」であることが重要である。

「音楽表現との剥離」に示される、ピアノと保育が自分の中で結びつかないという内容からは、課題とする曲自体に、学生が、将来の保育者となる自分の姿と結びつくような選曲を指導者が考えなくてはならない。このことから、「将来の保育者とし

での自分と結びつけやすい曲」を指導者が選曲することが必要である。

以上の見地から、苦手意識克服を目指したピアノ指導には、「既知の曲および既知の曲からの展開」、「親しみやすさ」、「分かりやすさ」、「将来の自分と結びつく曲」という特徴を備えた曲を、指導者が選曲することが重要であると考えられる。

2 「変奏曲」の有効性の予測

(1) 「変奏曲」とは

「変奏曲」は、主題に続いて、その旋律・和声・リズム・性格などを様々な方法で変化させた幾段かを接続して構成した楽曲である（新村 2417）。特定の主題や音楽素材に、様々な方法で変化を加えてゆくことを〈変奏〉といい、主題といくつかの変奏とからなる楽曲形式を〈主題と変奏〉、あるいは〈変奏曲〉という（『新訂 標準音楽辞典』1756）。

つまり、ある曲を、原形が残された形で変化させて、様々な音楽の多様性を表現している楽曲ということができる。その変化は、リズム、拍子、長調と短調、音高、テンポ、メロディの移行（右手から左手へ）、メロディの変化、アーティキュレーション、和音などに表されている。

(2) 「変奏曲」の有効性の予測

「変奏曲」は、特定の主題や音楽素材に、様々な方法で変化を加えているため、まず、学生の既知の曲、将来の保育者としての自分と結びつく曲を選曲し、その曲が変奏されている「変奏曲」を選曲することが指導者として課題となる。例えば、学生に親しみがあり、同時に、実際の保育の現場で使用されている童謡や外国曲が挙げられる。

「変奏曲」でのメロディの変化は、Ⅱ-2-(3)で明らかになった「楽譜が読めない」、「リズムが苦手」を克服するためには、既知の曲が変化されているため、読譜の基礎的能力の育成と、リズムの理解に有効的である。

「拒否感」に示される、弾いていて楽しくないという内容からは、課題とする曲自体に、学生自身が「楽しそう」と思えるような選曲を指導者が行うことの必要性がある。この点においても、学生の既知の曲で親しみのある曲であれば、「楽しい」という感情を引き出すことができるのではないかと考えられる。

「音楽表現との剥離」に示される、ピアノと保育が自分の中で結びつかないという内容からは、課題とする曲自体に、学生が、将来の保育者となる自分の姿と結びつくような変奏曲を指導者が選曲する必要がある。この点においても、学生に親しみがあり、同時に、実際の保育の現場で使用されている童謡や外国曲の変奏曲は、「分かりやすさ」という点が、苦手意識を克服させる要因となり得ると予測できる。なぜならば、慣れ親しんでいる童謡や外国曲は、原曲（基になっている曲）が変化されても、その変化を理解しやすいと考えられるからである。その分かりやすさが、学習への積極的な取り組みにつながり、変化された様々な音楽的な特徴を知ろうとする意欲を喚起し、将来の保育者としての音楽的な素地を培うことができ

るのではないかと推測できる。

また、「変奏曲」は、原曲が形を変化させながら新たな表現を生み出しているため、何度も親しみやすいメロディが反復されているという性格を持っているといえる。この「反復」をいう点においても、何度も同じ音楽的な要素を繰り返し、さらに、少しずつ変化されていくことを学習することも「反復」につながり、自然と無理のない方法で、基礎的な演奏技法の体得や、音楽的知識の習得に有効であるのではないかと予測できる。

V 結語

英語教育とピアノ実技指導、この二つは一見全く異なるものの印象を与えるが、学生を指導するという点において、実際には両者に共通点が多いと考えられる。本稿では、初学者の教育方法という観点から、英語教育とピアノ実技指導について論考した。まず、英語やピアノ実技における学生の苦手意識を分析し、苦手意識をなくすための方策を検討した。

その結果、英語教育においてもピアノ実技指導においても、「既知のものを活用すること」が有効性が高いという推測に達した。英語教育においては、学生が中学校時代に学習した5文型を利用した「自由英作文」を行うことで、英語とは単に覚えるものではなく、自己表現に繋がるものであることを学生に認識させることができると考えられる。ピアノ実技指導においては、学生に合った「変奏曲」を指導者が選択し、それをを用いて実技指導することによって、学生がその曲に対して分かりやすさや親しみやすさを感じることができ、ピアノ実技に前向きに取り組むことができると予想される。

今後は、本稿で述べた「自由英作文」や「変奏曲」を利用した授業を展開して、その効果を検証してゆきたい。

参考・引用文献

芦永奈雄『「本当の英語力」は5文型で劇的に伸びる』大和出版，2004， pp. 243-45.

Cowie, Neil and Sakui, Keiko. *Get It Down*, Cengage Learning, 2008, p. 3.

新村出編『広辞苑 第5版』岩波書店，1998， p. 2417.

『新訂 標準音楽辞典』音楽之友社，1991， p. 1756.

註

- 1) 本論文の第2章2節は、伊達優子著『保育者養成課程学生のピアノに対する苦手意識の克服—変奏曲学習を通して—』中国四国教育学会編「教育学研究紀要」第56巻 2010年 を加筆・修正したものである。

The Importance of Using Things Students Have Already Known
—Effective Methods for Teaching Unmotivated Students in English Education
and Piano Training—

Masaru OGINO*1, Yuko DATE*2

This article tries to propose an effective method for arousing interest among unmotivated students. We especially focus on the students who are not good at English and those who think they are poor at playing the piano.

First, a report is made about the surveys conducted among the above students, in which we investigate their attitude toward English learning or piano practice. Next, methods are proposed for arousing interest among those students.

For the students who are not good at learning English, “free wring” using the five sentence patterns is proposed; for those who are not good at playing the piano, choosing for them a “variation” of the music which they have already known and thus are more familiar with is proposed.

Surprisingly, the proposed methods for arousing interest among the unmotivated students for English learning and piano practice are very similar to each other. In both learning, using the things which the students are familiar with would be more suitable: the five sentence structures for English learners and a variation of the music the students have already known. By using the things the students have already known, they think the English class or the piano practice is not so difficult, and this would give them the motivation to learn more.

Keywords: English education, piano training, aversion, motivation, the use of things already known

*1 Institute for Education and Student Services, Okayama University

*2 Faculty of Education, Shujitsu University, Department of Child Education, Shujitsu Junior College (Part-time Lecturer)
